メディアによる文化的公共圏の再編成
― 戦後における音楽祭の日米比較を中心に ―

Reorganization of the Cultural Public Sphere through the Media:
Music Festivals in Japan and the United States in the Postwar Era

森山 貴仁（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程）

【メンバー】

川本　彩花（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程）
野島那津子（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程）
園　　知 子（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程）

【ねらいと目的】

現在、音楽をめぐる環境は変化している。音楽産業において、CD など複製メディアの売上が減少する一方で、音楽祭を含むライヴ音楽産業のそれは増加傾向にある。これに伴なって、近年では音楽祭に関する学術研究もなされつつあるのだが、本研究の音楽祭に対するアプローチには、次の 4 つの特徴がある。

①まず、歴史的（1950～60 年代）に研究して、音楽祭が日本とアメリカに誕生し普及した背景・経緯を振り返る。②その際、主に主催者（promoter）に注目し、音楽祭と外部との接線におけるダイナミズムを検証する。これによって、音楽祭の開催に当たって生じた文化の衝突・協力を観察でき、ひいては文化と社会とのあり方をより明白にみることができるだろう。③また、J. ハーバマスとその後の公共圏論をふまえて、音楽祭を〈文化的公共圏〉の概念で捉える。④そして、音楽の大衆化に関連して―従来の文化産業批判ではなく―音楽祭を契機として文化的公共圏が再編成される側面に着目し、音楽祭を近現代の音楽文化を構成する 1 要素として積極的に捉えていく。

【活動の記録】

◆ 研究会

2010 年 1 月 28 日：森山「メディアによる文化的公共圏の再編成 ― 1969 年のウッドストック音楽祭における文化の対立と交差」GCOE 歴史研究班研究会.

2010 年 2 月 16 日：森山「メディアによる文化的公共圏の再編成 ― 戦後における音楽祭の日米比較を中心に」GCOE 研究成果合同報告会.

◆ 調査

2009 年 7～8 月：京都大学にて雑誌記事の収集（川本）、10 月 5～9 日：同志社大学にて資料収集（森山）

2009 年 11 月 3～19 日：アメリカ合衆国ワシントン DC 連邦議会図書館にて同左（森山）

2009 年 11 月～2010 年 2 月：大阪大学にて雑誌記事の収集（野島）

2009 年 12 月：大阪府立中之島図書館にて同左（野島）

2010 年 1～2 月：関西大学・神戸大学にて同左（野島，川本）

2010 年 3 月 11 日：朝日新聞大阪本社にて資料収集（川本）

◆ ユニット勉強会・ミーティング

2009 年 6 月 23 日：第 1 回・9 月 2 日：第 2 回・10 月 27 日：第 3 回・12 月 29 日：第 4 回
2010 年 1 月 19 日：第 5 回・2 月 12 日：第 6 回・3 月 12 日：第 7 回・3 月 23 日：第 8 回

【成果の概要】

本研究では、事例として日本とアメリカの 3 つの音楽祭を取り上げた。すなわち、アジア・日本で最初の国際音楽祭で、朝日新聞社の新社屋ホールの柿落としとして 1958 年に開始された〈大阪国際フェスティバル〉、1960 年代アメリカの最も著名なロック音楽祭で、対抗文化の理想的な実践として語られる〈ウッドストック音楽祭〉（The Woodstock Art and Music Fair 1969 年）、そして 1969 年と 70 年にニューミュージック・マガジン社によって開催された日本初のロック音楽祭〈日本ロック・フェスティバル〉である。これらの事例から明らかになったのは、次の 3 点である。

まず第 1 に、音楽祭とは、音楽の大衆化が進むなかで既存メディアに主導・支援されながらつくられたことである。大阪国際フェスティバルは朝日新聞社の影響下で企図され、ウッドストック音楽祭は開催後は映画などの収益に依存せざるを得なくなり、日本ロック・フェスティバルにおいても、雑誌が聴衆（参加者）にとって大きな影響力をもたらすことになる。ここには、既存メディアと音楽祭という新たな〈メディア〉の重層が見受けられるだろう。

第 2 に、音楽祭という空間は、文化的葛藤や対立のなかから生まれ発展したことである。既存メディアとの重なり合いの一方で、大阪国際フェスティバルでは新聞各社の競合や大阪と東京の音楽界の対立が、ウッドストック音楽祭では若者と成人、都市と地方、新旧メディアの対立と協働が、日本ロック・フェスティバルでは音楽祭のあり方をめぐって雑誌に対する聴衆からの批判が生じたことが、それぞれ観察された。しかし、これらの多様な葛藤や対立が、音楽祭の誕生や進展を実現させたのである。

そして第 3 に、音楽祭は、（コアな聴衆のみならず）音楽への興味の有無をこえて幅広い人々を引きつけ、文化的公共圏の再編成に貢献したのではないかということである。今回の事例から、人々は概して音楽祭を、音楽を超えた文化的現象として捉えていた様子がみえてきたのだが、こうした多元的な「聴衆」（観衆）を引きつけうる音楽祭の特性は、文化的公共圏を再編成するひとつの重要な契機になったと考えられる。